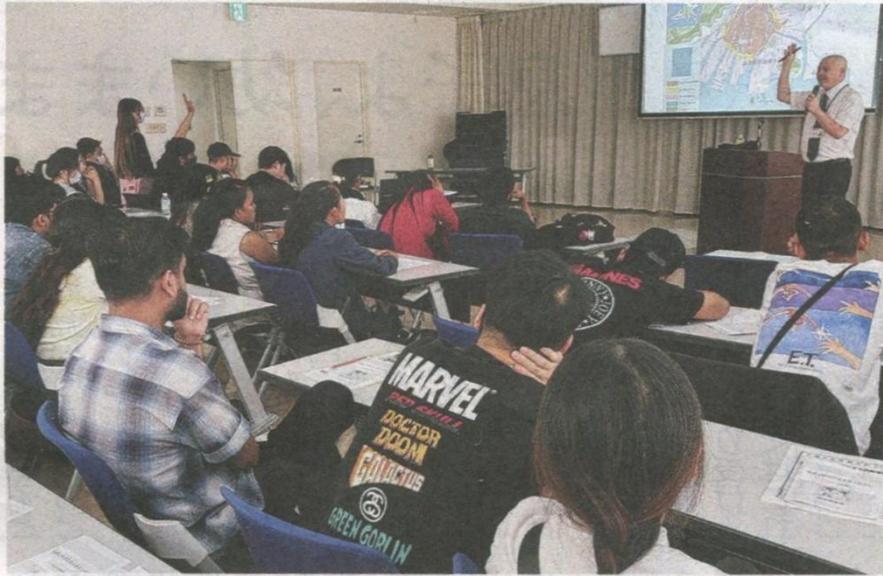


# 留学生ら核の怖さ学ぶ



岐阜で被爆体験伝承者が講演

被爆者の代わりに証言を伝える広島市の被爆体験伝承者の講演が9日、岐阜市鶴舞町のワークプラザ岐阜であった。市内の専門学校2校で学ぶアジア9カ国の

広島市への原爆投下の被害、被爆者の証言がアジア各国からの留学生に伝えられた講演会。岐阜市のワークプラザ岐阜で

留学生ら約180人が、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学んだ。

母国同士が軍事衝突中の留学生もいる中、日本で学ぶ間に平和の礎を築いてもらおうと、県専修学校各種学校連合会岐阜地区が主催した。伝承者は国立広島原爆死没者追悼平和祈念館が11年前から各地に派遣している。

この日は広島市の本覚寺住職渡部公友さん(54)が、被爆当時、13歳だった新井俊一郎さん(93)の体験を伝えた。

新井さんは1945年8月6日から1週間、疎開先

の原村(東広島市)から広島市の自宅に帰省。原爆投下当日と翌日、市中心の爆心地近くを通り、入市被爆した。渡部さんは、新井さんの日記や広島平和記念資料館所蔵の写真やデータなどを示し、原爆の被害、後

遺症で苦しむ新井さんの体験を詳述。「日本も皆さんの国と戦争した。平和を守るため、私たち一人一人ができることをすべきでは」と訴えた。

パキスタン人のハムザ・ビンさん(23)は「日本が被爆国とは知らなかった。戦争に核兵器は絶対に使ってはいけない」。中国人女性(19)は「米国が原爆投下した。とても怖いもの。使わない方が良い」と話した。

(浅野宮宏)